

# ～松沼記代教授について～

松沼教授は、  
認知症の認知症状（記憶障害、見当識障害、思考・判断・遂行(実行)機能など）  
や行動・心理症状（幻覚・妄想・徘徊など）のケアに加え、介護者への支援についても執筆しています。



この研修では、

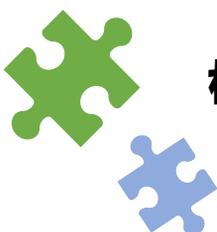
**「心の面から認知症のBPSDがなぜおこるのか？」**  
をテーマに講演されます。

認知症のBPSD＝認知症の行動・心理症状

## 見当識障害による不安へのケア －行動・心理症状の緩和の基本－

認知症では、記憶障害に基づいて見当識障害が現れます。そして、場所や時間の見当識障害から、現在の状況判断ができず、強い不安に包まれます。この不安が、妄想や徘徊といった行動・心理症状の基盤となります。例えば、自分がどこにいるのかわからなかったり、自分の周りの人々が誰かわからなかったり、朝食をとったかどうか忘れてしまったとしたら、私たちはどのような感情に襲われるでしょうか。記憶障害があって数分前のことを覚えていられなかったら、強い**不安や焦燥感**に襲われることが理解できると思います。ある軽度の認知症の人は、入院直後から「何がどうなっているのかわからない。頭の中が真っ白で怖くてしょうがない」と、訪問者が来るたびに話されていました。その後、食事が喉を通らなくなり、何もしようとしなくなりました。このような状態は食事拒否や意欲低下と呼ばれ、行動・心理症状として扱われることとなります。認知症の人の不安や混乱を取り除く対応が、行動・心理症状の予防に役立ち、ケア全般の基本となります。 【以下 略】

認知症の正しい理解と包括的医療・ケアのポイント第3版より抜粋



**松沼教授の講演を聴いてみませんか？**

**日頃の疑問を教授に訊いてみませんか？**

**ぜひ、ご参加ください！**